

チューブギャラリー

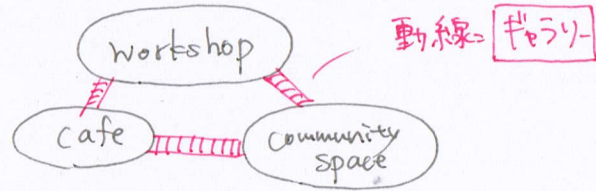
1517046 澤田 真由美

— ギャラリーによるコミュニケーションの活性化 —

Concept

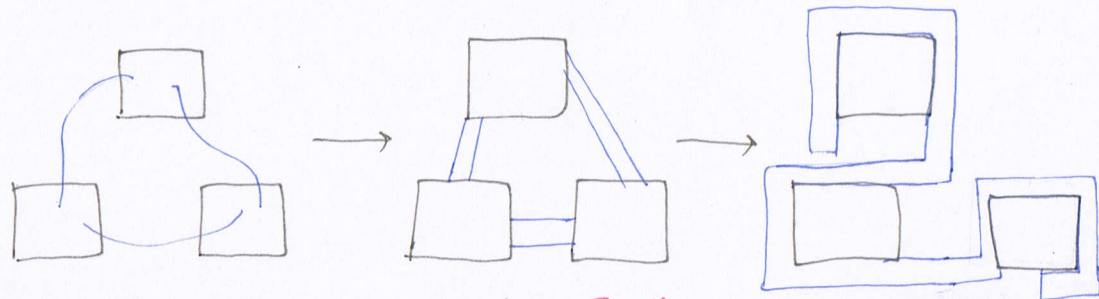
カフェやコミュニティスペース、ワークショップは人と人が絡む場であり、自然とコミュニケーションが生まれる。では、ギャラリーはどうだろうか？
展示された作品を個々に鑑賞する場であり、少なくともコミュニケーションが活性化することは無い。そこで、ギャラリーをただの展示スペースではなく、機能同士のつなぎ役とし、ギャラリーにおいてコミュニケーションの活性化を目指す。

⇒ 機能をつないでいるもの ----> 動線
動線をギャラリーとし、機能同士をつなぎ、どこへ行くにもギャラリーを通るようにする



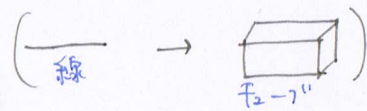
ギャラリー → コミュニケーション

機能にチューブ化した動線(ギャラリー)をまきつけ 視線の交差、動線の交わりを積極的に起こすことで コミュニケーションの活性化となる。



機能を動線が「つなぐ」
→ 動線なので「直線」はあてにならない

線を長く「チューブ」化することで
動線が「空間」になる
これを「ギャラリー」とする

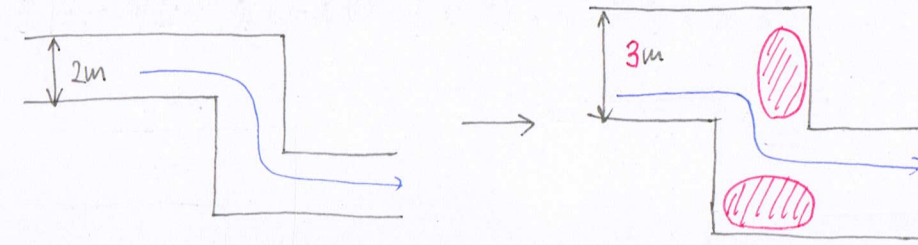


チューブに機能をまきつけたり
チューブが機能に介入すると
視線の交差、動線の交差が
起こる。
→ コミュニケーションの活性化となる。

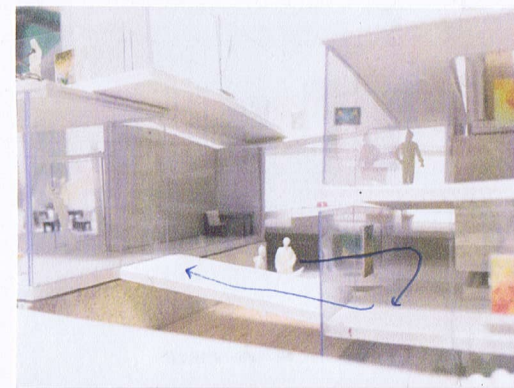
チューブの幅を全て一定ではなく、2m, 3mと2通り設ける。
地下 ~ 1.5F までは主に2m, 1.5F ~ 2F は主に3mとした。

- ・ 2m チューブ ... 絵や小さいものの展示
- ・ 3m チューブ ... ワークショップで作った大きな作品や常設ではないものの展示

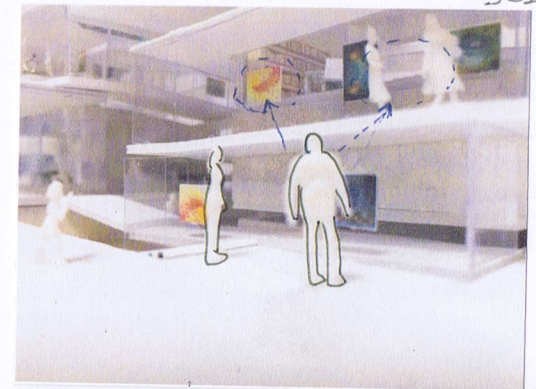
チューブ幅を変えることで飽きがこないようにする。また人がとどまる場をつくる。



同じ動き(→)でも
3m ありと空間に少し
余裕がとき、
とどまる場所がでる。
→ コミュニケーション活性化



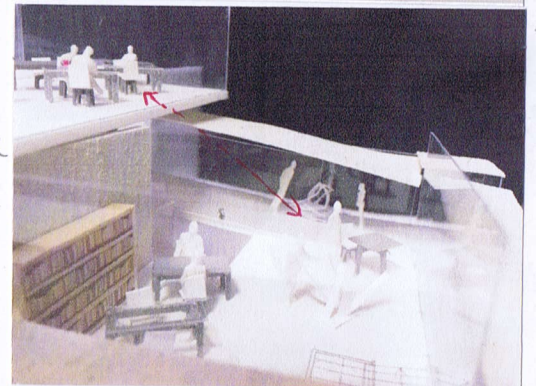
← チューブは
地下へもつなげて
いて、ドライエリア
においてもチューブの
作品が見えたり
視線の交差が
生まれる。



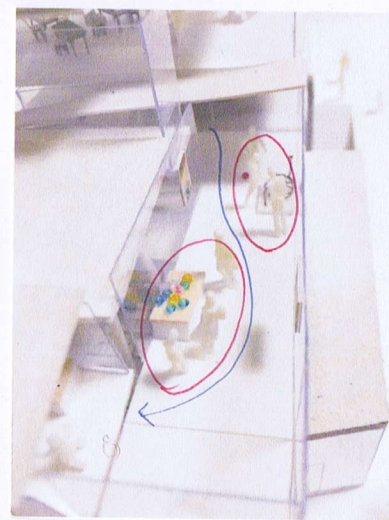
← 外を歩く人からも
チューブギャラリーが
見え、興味をそそ
ぐ中へ人を呼び込む



← チューブにいる人から
ワークショップにいる人
が見える
(視線の交差)



← 2F ワークショップから
下をのぞけば
1.5F ワークショップの
様子が見える。



← チューブ幅3m,
作品をおくことで
とどまる場所、たまり場となる。
そこで作品について
話し合ったり... →



これらによってコミュニケーションの活性化を目指す。